

「イメージ奏法」によるアクティブ・ラーニング音楽実践授業 ー汎用的能力を育成する主体的・対話的で深い学びー

武本 京子

愛知教育大学 音楽教育講座

Active-learning Music Practice by "Image Method"

- To Develop Generic Skills in Proactive, Interactive Deep Learning -

Kyoko TAKEMOTO

Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

筆者が考案した「イメージ奏法」とは、音楽から受ける抽象的なイメージを、言葉、色彩などで具体化するものである。演奏者は、①イメージ語の選定、②イメージグラフと物語の作成、③表現曲線の作成、④色彩の選定の各プロセスを経て、具体的な演奏法を導くための「イメージ楽譜」を作成する。授業では、アクティブ・ラーニングの形態を取りながら ICT を活用して「イメージ楽譜」の内容を受講生全員で共有し、討論する。結果として、音楽作品における曲想、構造や背景などの意味、及び音楽の多様性について共通理解を得ることにより、学生の主観的な意見から汎用性の高い見解を導くことが可能となり、個性的な音楽表現を行うだけでなく、客観性にすぐれた演奏や発表技術の向上がみられた。また、「イメージ奏法」においては、人間の汎用的能力の向上を期待できることから、教師としての資質向上をも期待できることが分かってきた。本稿では、心が弱り、挫折した人間はどのような音楽を求め、どのように音楽と接すると心が再生していくのかを受講生全員で協働的に考え、人間の心を救うための音楽の在り方について検討する実践授業の様相を論じる。その上で、表現力やピアノ演奏技術の向上と、音楽教師の在り方や使命感といった汎用的能力の向上を目指す「イメージ奏法」の取り組みが、人の心に希望や勇気を与え、ひいては人間の心の教育にも有効であることを述べる。

Keywords : イメージ奏法 ピアノ演奏法 音楽教育 アクティブ・ラーニング 汎用的能力育成

I はじめに

2017年に改訂された音楽の小・中学校の新学習指導要領では、「知識や技能の習得」と共に「思考力・判断力・表現力」の育成と「学びに向かう力・人間性など」の涵養などが目標とされ、音楽の授業が「生活や社会と関連づけること」「主体的で対話的な深い学び」や「カリキュラム・マネジメントの実現」などに取り組むように求められている。

小中学校の音楽教師は、授業で器楽や合唱などの伴奏を受け持つ。単に伴奏の CD を流して子どもたちに画一的に歌わせるのではなく、子どもたちの日々の状

況を把握して臨機応変に弾き方を変化させられる教師が望ましい。その伴奏は、広い視点でクラスを把握し、個々の子どもの心をまとめ生かすために音色や音楽の流れを誘引する形で演奏できなくてはならないと考えている。そのためには、音楽の教師は、音楽で子どもたちの心を一つにし、喜怒哀楽を自由に表出させる演奏ができるようになっていくことが求められる。

筆者は愛知教育大学の教育現場において、教職を志す学生が、演奏技術や表現力の向上を目指すためには、音楽表現の多様性を学び、他者との共感性を養うことが重要と感じている。そのために学生が主体性を持って音楽作品に取り組み、その解釈を受講生全員で共有、

対話し、互いの違いを認めながら上達できる仕組みを作ってきた。そして筆者は、その仕組みをまとめて体系化した「イメージ奏法」を考案した。

「イメージ奏法」の目的は、音楽作品に対する心理を掘り下げ、自分の心や他者との対話を通して、音楽の奥に込められた感情を引き出し、解放することにある。つまり、作曲者が楽譜に記載した音符から、その奥に託された思いを符号化し、作品の分析を行なう。

「イメージ奏法」とは、抽象的な芸術である音楽を言葉、色彩、映像などで可視化することで、①楽譜に書かれた内容を理解し、②音楽に内包される感情を認識して表現したい世界を確定し、③適切な音色を出すためのピアノ奏法指導法かつ、教育法である(武本 1995、2013、2017a、2017b、2017c、2018a、2018b)。

本稿ではまず、これまでに筆者が大学教育で実践してきた音楽の教師となる学生に必要な実践授業の内容を述べる。「イメージ奏法」の授業の概要をまとめ、その教育活動での効果を述べる。その上で、音楽を通して人間にとって何が大切なのかを気付く仕組みを確立し、音楽の中から人間の感情を読み取る方法の確立、学生が将来学校現場で子どもの心に寄り添うためのアクティブ・ラーニングを行なう授業の提案を行ないたい。ピアノ演奏法の授業において、学生が楽譜から感情の変化を読み取り、それを演奏に反映させる技術を習得し、受講生全員で作りに上げた「心を復活させる音楽作品」を作り上げた過程の実践例について示しながら「イメージ奏法」の音楽の効用について述べていきたい。

II 集団によるピアノ演奏法授業

「イメージ奏法」による主体的で対話的な深い学び

1. 汎用的能力の育成

教育大学において、学生の「人間力の育成」は、とても重要な課題である。将来、教師となった時、教科の専門的スキルと共に、そのスキルをどのように伝え、子どもたちに音楽に対する学習意欲を高めさせるかが課題となってくる。

小中学校の音楽教師は、子どもたちに音楽を聴かせたり、子どもたちが演奏したりすることを通じて、いかに人間の心に寄り添い、音楽が力を与えてくれるかを子どもたちに伝え、音楽を通した心の共有をはかることができるかが重要である。しかし、教員養成課程の学生はその演奏技術習得にばかり目が行き、音楽の楽しさや深さを知らず、音楽に対する感動の薄く、技術習得に精一杯でただ音を鳴らすだけの演奏に陥りがちだ。そこで音楽の中に込められた作曲家の思いを理解し、学生の心の奥底に眠っている感性と能力を引き出し、生き生きと自信をもって音楽に取り組ませるかが、著者の長年の課題であった。

そして考案した「イメージ奏法」を授業に導入し、学生が主体的に取り組み、ピアノレッスンを協働学習として受講生全員で共有するアクティブ・ラーニングの形をとるようになった。音楽を表現するための過程から、①練習計画の立案、表現を実現するための課題の発見を主体的に行動するプランニング能力の育成、②音楽から受ける感情を客観視できる自己理解と自己管理能力、③それを他の受講生と共有することからの多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるコミュニケーション能力、④他者と協力・協働して社会に参画できる能力など汎用的能力の育成を目指してきた。

2. 音楽表現を主体的に考え、可視化する。

音楽というものは、音が消えるとそこに形がないために、しっかりと記憶にとどめるために聴覚以外の脳でも感知できるように、言葉や映像などで可視化すると音楽をより認知しやすいものになる。

心のもとには脳にある。思考からくる行動も心の働きである。心は、高次の脳機能から成り立っているといえるが、記憶はもとをただせば、経験が積み重なったものである。その見たり聞いたりした情報は、海馬に短期記憶されるが、しばらくすると忘れてしまう。しかし繰り返し情報が入ってくると、海馬は、生命維持にかかわる大切な情報と判断し、大事な記憶を補完する側頭葉に長期保存している。

音楽を演奏するときは、ただ聴覚からの信号によらず、自分の心が何によって動かされ、何にワクワクするのかを検討し、音楽で何を伝えたいかをよく考えることが大切である。脳内の記憶の扉を開け、音楽から受けるイメージを、言葉、色彩などで可視化することによって、音楽が自分に何を与え何を生み出すかの認知をすることにより、音楽がより身近になってくる。すなわち、聴覚と視覚を聯合させることで、認知が深まる。

「イメージ奏法」とは、こうして作成された「イメージ楽譜」を通じて音楽に内包される感情を認識し、その内容を表現するための、適切な音色を出す具体的な奏法を習得する仕組みである。(武本 1995、2013a、2013b)。可視化においては、脳のあらゆる場所を使い、その仕組みを①イメージ語の選定、②イメージグラフと物語の作成、③表現曲線の作成、④色彩の選定を経て「イメージ楽譜」を作成、⑤映像を制作の手順で行う。イメージの表現方法は時代と共に変化し、近年ではスマートフォン等の発達で自分のイメージを可視化する方法が多様化し、写真加工のソフトなどを使い、ICTの画像などでイメージを可視化する学生も増えてきた。このようなICTを活用して容易に音楽の可視化を行うことにより、心にしまっていた世界を表出させ、演奏者の中に眠る記憶や感情を明確に呼び起こすこと

ができる。そのことにより、音楽という手段を使い自分自身を表現することにつながるのである。(武本 2017a、2017b、2017c、2018b)

Ⅲ 積み上げの実践授業 「イメージ楽譜」による音楽の可視化

「イメージ奏法」では、音楽に含まれる様々な内容を把握するために、学年を追って教育している。短時間の授業で効果を得るために、学年別に以下のことを重視しながら積み上げ学習を行う。

1年生では、音楽の中にあるイメージに気付く。2年生では、作曲家と自分のイメージの統合。3年生では、作品の音楽分析による音楽の中に隠された人間力を読み取る。4年生では、音楽分析による自分自身のイメージの体現化である。その結果、図1のように1、2年生のときは、自分が音から感じたイメージを素直に具体化することにより、発想を自由自在に膨らませる習慣をつけ、学年が進むにつれて、作曲家の意図と自分のイメージを重ね合わせ、音楽作品の分析による音楽の中に隠された人間力を読み取り、映像化するまでに発展させることができていく。

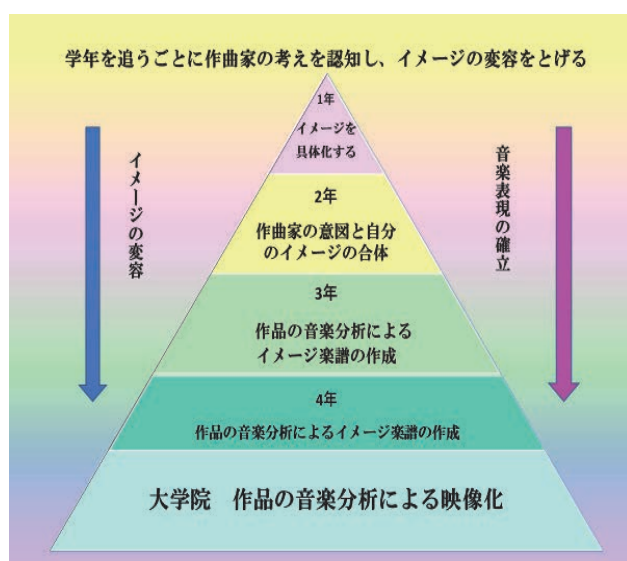


図1. 授業を追うごとの「イメージ奏法」実践の変容

1. 1、2年生: 「初めてのイメージ奏法」 バッハ: インヴェンション全曲講座(1年次前期)

(1) 実践授業1～3回目 音楽の要素を知り、そこから自由な発想を引き出す

大学1年の前期のピアノ演奏法において、J. S. バッハのインヴェンション全15曲を「イメージ奏法」により、自由にイメージ分析を行なう授業を行なっている。この授業では「イメージ奏法」の基礎的な実践

を体験する。まず教師は、図2のようにインヴェンションの形式や構造、フーガの音楽的要素の説明をして各テーマを色分けしたものを提示し、音楽の要素の可視化への導入をする。教師が各曲のテーマや構造について説明し、それを受け学生が曲のテーマに沿って自分が何を主張したいかを考える。それを「イメージ楽譜」^注として発表し、受講生全員と共有し、互いのイメージの共通性や違いを確認する。そして音楽から人はどんな気持ちを抱くのかを表出させ、考えさせる授業を展開している。



図2 教師からのテーマや構造についての説明

受講生は事前学習においてスマートフォンなどにより自分のイメージを映像化した「イメージ楽譜」を作成し、その内容を発表、討論するための準備をする。

「イメージ楽譜」を作成したことでのどのような発見があったかについての学生へのアンケートの回答から以下のような結果が挙げられた。

(a) テーマは18、5個、テーマの反行形は19個、テーマの反行形後半反復は第1部と第2部の2カ所、テーマ前半拡大は8個、テーマ前半反行形は3個あり、ほとんどテーマとその変形で曲が作られていることに気付いた。

(b) 二部では一部での始まりが左右入れ替わって同じ形になっていること、跳躍音に込められた意味や同じテーマでもわずかに違いがあること、例えば、テーマの最後の音が下降していると少し暗い感じがした。

(c) テーマの反行形後半反復の後にカデンツがくるなど、曲の盛り上がりやテーマの使われ方の関係性を感じた。

(d) テーマごとに色分けがしてあったり、テーマの反復進行の部分も理解しやすく色塗りをしてあったりしたため、曲の構造への理解も深めることができた。

「イメージ楽譜」では、インヴェンションのテーマごとに色分けがしてあったり、テーマの反復進行の部分も理解しやすく色塗りをしてあったりしたため、視覚

的理解を深めることで、曲の構造への理解も深めることができるようになったと考えられる。

(2) 実践授業4～6回目

「イメージ楽譜」の共有で音楽の多様性を知る

「イメージ楽譜」を作成後、それを提示して共有し、討論を行なう。その結果、曲について各々の学生がどのように解釈し、それをどのように「イメージ楽譜」に反映させたかのアンケートをしたところ、次のような意見があった。

- (a) テーマがなにを表現しているのかを考え、色を識別した。
- (b) テーマとテーマの反行形と拡大形の色の関係と表現曲線の向きを考えた。
- (c) 盛り上がっていく時は、表現曲線の幅や膨らみの違いを段々大きくした。
- (d) テーマの終わりの音で他のところと大きく違っているところに色を加えた。
- (e) 物語のイメージが膨らむよう、物語の流れと合わせて背景にイラストを入れた。
- (f) セリフとナレーション、また感情が高まる部分で文字のフォントを変えた。曲全体をみて自分が表現したい色を決めることは大変だったが、何度も考えることで塗りたい色がはっきりとしてきて、自分がどう弾きたいのかも掴めるようになった。



図3 学生が「イメージ楽譜」の説明をしている様子

このように楽曲における学生間のイメージの多様性と自分の違いを相互に認識した。また、音楽作品をどのように演奏するかという一方向的な授業ではなく、学生の発表ではスクリーン上に「イメージ楽譜」を提示し、受講生と教師で何を表現したいのかを共有できる。楽曲の理解を受講生全員で主体的に考え、討論し、音楽の中にある作曲家の想いを探ることから、音楽の中から人間に必要なものが何なのかを考えさせることに重きを置いた。

ICTを活用した「イメージ奏法」の授業の中で、自分のイメージを発表し、討論していくことで、その中で自分と人との違いや共通点を見出しながら、音楽表現によって自分は何をすべきなのかに気付いていくように授業を展開している。

(3) 実践授業7～9回目

イメージを再現する具体的奏法の習得

授業の後半では、各自が作成した「イメージ楽譜」の内容を再現するための、具体的奏法の実技指導を行っている。具体的には、①この音色はどのように出すのか、②どう工夫すればイメージ通りに聞こえるのか、③どのように練習すれば、奏法をマスターできるのか、④自分が喜怒哀楽の様々な感情や構造やフレーズをどうとらえ、それを表現するためには何をすれば良いか？などの観点から指導する。

その間、学生は将来、児童・生徒の心に寄り添うための多様な表現方法と、そのために必要なテクニックと感情の連動の仕組みを学ぶ。また、それを習得していくための自分の計画など、特に精神的強さや緻密な努力の方法などにも指導の上で言及している。何を表現するためにどのような方法でそれを実現するのか、そのために何をしなくてはならないかを指導することが重要であると考えている。主に、指の角度、手の握力の使い方、腕の使い方、打鍵のスピード、打鍵の深さ、体の使い方、「間」の使い方、などをどう使えばよいかを考えさせる。その後、イメージを表現するのに適切なタッチに名前を付け、タッチと学生の意識が連動するように指導を行なっている。その結果表現意欲や練習意欲が増加し、スキルが伸びることが実証された。(武本 2013a、2013b、2017a、2017b、2017c、2018b)

(4) 実践授業10～15回目

協働学習によるイメージの集約、統一の方法を学ぶ

授業の仕上げとして、協働学習を通じてグループのイメージを決めていく。学生は各自これまでの授業の中で、《インヴェンション》全15曲に対する個別のイメージを決定する。その後数人ずつでグループを作り、個々のイメージの中からグループで一つのイメージを構築する。学生たちはこの話し合いの中から、異なる意見をいかにまとめ、互いの合意点を見つけ出すかを学ぶ。互いが納得するためには、音楽の中にある要素や構成、形式など、細部にわたり研究し、対話を行なう必要がある。その過程で教師は、曲の重要なポイントだけを示唆し、学生が自然に答えを導けるように、方向付けだけを行なっている。学生が講義をただ受けていたところに比べ、学生一人一人が生き生きと音楽を研究し楽しむようになっている。また、演奏研究発表においても可視化の手段により、図4のようにグループごとに工夫を凝らし、音楽から様々な人間模様を構築していくことに成功している。この協働学習を通じて、将来の学校教育現場での多くの児童・生徒の意見の集約など音楽授業における学習指導に役立つ効果があると思われる。

教育においては人と関わること、コミュニケーションをとることが重要である。「イメージ奏法」は音楽

の多様性と力を感じ、自分らしさを引き出す点において従来のピアノ実技指導と大きく異なることを可能にしていると言える。



図4 1年生の「イメージ奏法」実践授業の協働学習発表

2. 3、4年生：音楽に内在する力の応用

音楽作品の内容を追求し、音楽が人間に与える影響と効果を考えるコンサートを目指す

3、4年次では、人が挫折し苦しい時にどのような音楽が救いとなるかを、ディスカッションし、音楽が心の中でどのような位置にあるかを考え、心を動かす楽曲を受講生がそれぞれ選曲する。またその曲が人の心にどのような効果を与えるかを考えることによって、ピアノ演奏はどうあるべきかを考え、奏法を見つけ、その演奏技術を習得する。

(1) 討論1回目「音楽作品に何が隠されているか」

作曲家は、作品に自分の人生の投影をしたり、社会に対する抗議をしたり、愛や自然に対するロマンを込めたりしている。それぞれの作曲家の時代背景や人間模様を調べていると、作品の底にある主張が見えてくる。学生は自分の心を動かした作品を持ち寄り、その作品が何を主張したいかを話し合う。また、自分が挫折し、悲しく苦しい時は、どんな曲を弾きたいのか、どんな曲が自分を救うのかの話し合いも行なう。多くの作品に向き合い、音楽作品の内容を調べることで、音楽に含まれる多様な考えに気付くことができるのである。

(2) 討論2回目「悲しい、苦しい時はどうやって乗り越えられるのか」

自分がつらい時、どうされたら嬉しいのか、なんと声をかけてもらえたらうれしいのかをディスカッションする。学生の意見を集約すると1) 悲しく、つらい時は、まずその原因をはっきりさせ、それを開放しはっきりすることが大切である。2) その次には、思い切り泣く。3) 自分の心を癒す。そして4) 前に進む順に癒されていくパターンが多いことが分かった。

(3) 討論3回目「音楽で人の心を表現するには」

これまでの流れを受け、学生は「同質の原理」にのっとり、表現したい感情に適した作品を見つけ、分析と奏法を研究する取り組みに入る。すなわち、曲を追うごとに元気が出るようなプログラムを構成し、聴衆の心を元気づけることができるコンサートを企画し、実践する。様々な感情を表現する楽曲の中から、今の自分が一番表現したい内容に即した曲を選び、自分や周りの人に愛や勇気を与えるためのイメージの映像を作成し、演奏発表を行なう。

コンサートでは「絶望した人間が希望を取り戻す」という場面を意図的に設定し、それを4つの段階に分け、各段階の感情と結びつきの強い楽曲の選定を行なった。4段階とは、「イメージ奏法」の実践において「イメージ語」を選択する際に指標となる4つの分野と結びついている。すなわち、A：明るく外的、B：明るく内的、C：暗く内的、D：暗く外的である。実験においては、D→C→B→Aの順に段階を設定することで、絶望から悲しみ、癒しを経て希望へとつながる展開を図ることとした。



図5 「イメージ奏法」実践授業 『ラフマニノフ 鐘』

第1段階では、絶望や怒りなど、無意識に閉じ込められている負の感情の解放を意図して、ラフマニノフの前奏曲嬰ハ短調「鐘」、ショパンの練習曲ハ短調「革命」、カプースチンの《トッカティーナ》、プロコフィエフのピアノ・ソナタ第2番などの4曲を用いた。



図6 「イメージ奏法」実践授業 『ドビュッシー 月の光』

第2段階では、悲しみの受容を意図し、スクリーンの練習曲ハ短調 op. 2-1、ショパンのノクターン嬰ハ短調（遺作）で深い悲しみ、リストの《ラ・カンパネラ》とドビュッシーの《花火》、《月の光》でかすかな希望を表現した。

第3段階では、悲しみからの復活を目指した。サティの《ジムノペティ》で安堵感や、心の解放と回復を暗示し、ショパンのノクターン変ホ長調 Op. 9-2、リストの《ため息》リスト＝シューマンの《献呈》などで真の愛や自然の美しさに気づき、愛され守られている実感を得、回復していく喜びを表現した。



図6 「イメージ奏法」実践授業 リストの《ため息》

第4段階では、幸福感のあとに訪れる、湧き上がる再生への決意を目指し、リストのハンガリー狂詩曲第6番、ショパンの英雄ポロネーズ、レ・フレール《空へ》では、湧き上がる再生への決意と自信、躍動を表現した。

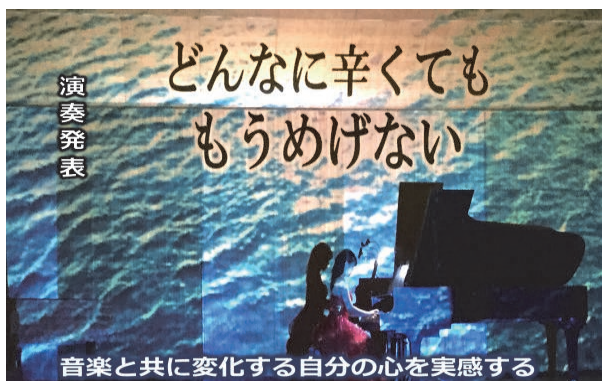


図9 「イメージ奏法」実践授業リストハンガリー狂詩曲第6番

このように、プログラムの展開に沿って元気が出てくるような演奏と映像を制作した。映像は暗いものから徐々に明るく上昇していくイメージのものに変化させ、最後には大空や宇宙の大きな画像を配置した。また、未来に向かっていく自信や、やる気が出るような前向きな「言葉」を用い、気分が上昇するように意図した。

(4) 協働学習の研究発表

そして図10のように、2017年3月に行なった受講生全員の協働学習で制作し演奏したチャリティーコンサートでは、1200人を超える聴衆に音楽が人の心身に与えるプラスの影響を提示することができたことで、音楽の力を学生一人ひとりが認識できた。演奏を担当する者、映像をつくり操作する者、コンサートの運営や準備などを協働的に行い、音楽で多くの人々を感動に導き、人に貢献できる経験をすることができた。



図10 受講生によるチャリティーコンサート

3. 大学院生の研究発表

大学院では図11のように、自分のテーマを決めて作品を掘り下げ、研究成果を「イメージ・ファンタジー」という形でコンサートを行なっている。このコンサートでは、院生が2年間かけて研究した作品に映像を付ける。映像は音楽の内容とリンクしており、映像に変化を与える指揮者と映像を操作する人、そして演奏者は呼吸を一つにして行なわなければならない。



図11 「イメージ・ファンタジー」院生修了演奏会

一般的に人間は、聴覚より視覚が勝ることから、映像制作においては、聴衆にとって視覚が聴覚に優越しないように配慮し、アニメーションの時間の使い方にも気を付けなければならない。そのために、視覚への信号がどの程度の間隔でもたらされると聴覚の妨げにならないか、受講生全員で検討している。本来音楽は、

耳で聞くことにより感動を与えられなければならないが、可視化することにより、人にどのような影響を与えているかを認識することができる。音楽を聴いて感動していたら自然に景色が変わっていたというような、理想的な変化を作り出すにはどうすべきかの討論が毎回行なわれている。

IV. 「イメージ奏法」の導入による教育上の効果

1. 汎用的能力の育成

「イメージ奏法」を教育法へ展開する際には、毎回の授業で学生によるプレゼンテーションを取り入れている。そうすることにより、学生が音楽作品の曲想と音楽的構造、背景などの相互作用、及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な研究の発表能力と技術の向上がみられるようになった。また、自分らしさを確立した音楽表現と技術習得方法を学び、人間の汎用的能力の育成を期待でき、教師としての資質向上を目指す教育法へ発展させることができるようになった。「イメージ奏法」の導入により、学生が楽曲の成り立ちや書法を主体的に分析・研究し、その曲が書かれた時代の社会状況や作曲家の心情などへの興味も深めることができる。それにより、音楽作品の深い理解を促せ、演奏法習得の過程で人間力を育成することができる深い学びを可能にした。

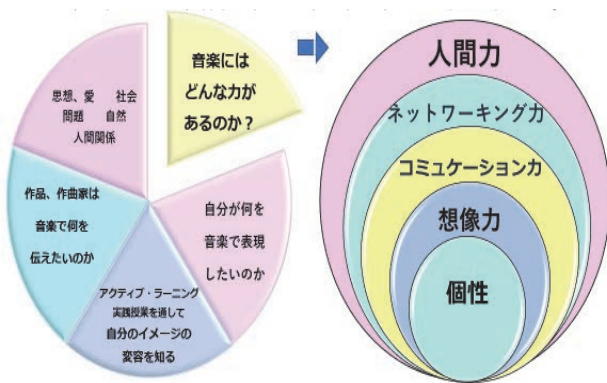


図12 「イメージ奏法」が作り上げる能力

2. 曲の構造の理解

「イメージ楽譜」を作成する過程において、テーマや作品構造の分析や、各フレーズの意味づけ、全体の構成を考えての物語作成を通して、曲の構造をよく考えるようになる。表現したいことを曲線、絵、言葉、物語で視覚化することにより、音楽という抽象的なものを把握する事が困難な学生や、また音楽表現が苦手であった学生も、音楽をより深く理解することができる感覚を得ている。それにより、音楽的構造を把握し

やすくなり、思い描いた表現が実現した時の喜びや達成感を味わうことが可能となった。

3. 対話や協働する事での学び

学生は対話を通して自分らしさに気づき、向上心を高めることができる。音楽作品を取り巻く社会や思想、感情、自然などについても考え、他者と共有することにより、コミュニケーション能力の育成を図ることにつながっている。また「イメージ楽譜」がICT機器を活用することで教師と生徒のコミュニケーションツールとして機能し、共有することができる点も重要である。なぜなら授業において、学生と教師の対話や個別の指導には時間的制約があり、短時間での指導が求められる。その際、「演奏設計図」である「イメージ楽譜」を用いることで、視覚化された学生の意志を効率的に読み取ることができる。

これらの「イメージ奏法」の利点を通して、学習指導要領の中でもとめられている思考力・判断力・表現力の育成に役立て、生活や文化などと関連付けられる人間教育に結び付けられる教師を育てることになると考えている。

V おわりに

これからの教師に求められていることは、学習指導要領にも明記されているように、「学習の主体となる子どもが、感性を働かせながら、学校での学習内容を生活や社会の音と音楽との関わりを実感できるようにすること」である。特に音楽に求められていることは、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かにに関わる資質・能力を育成することを目指す」ことである。特に①何を知っているか、何ができるかの「知識・技能」の習得、②知っていること・できることをどう使うかの「思考力・判断力・表現力」の育成、③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかという「学びに向かう力・人間性」などの涵養が重要だと言える。

「イメージ奏法」を授業に導入することで、アクティブ・ラーニングによる授業を実践し、上記のような汎用的能力を養うことが可能になった。受講生には「イメージ奏法」を通じて、音楽の教師としての資質と能力を育成して欲しい。

【謝辞】

この研究は、2017 年愛知教育大学教育研究重点配分経費、及び科研費基盤研究（C）2018～2020 年度（18K00206）の助成を受けたものである。

【引用・参考文献】

1. 文部科学省「小学校学習指導要領音楽編」2017、p. 1-124
2. 文部科学省「小学校学習指導要領総則編」2017、p. 1-146
3. 文部科学省「中学校学習指導要領音楽編」2017、p. 99-106.
4. 文部科学省「中学校学習指導要領総則編」2017、p. 1-149.
5. 文部科学省「高等学校学習指導要領音楽編」2017、p. 22-99.
6. 文部科学省「高等学校学習指導要領総則編」2017、p. 1-193.
7. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm (2018. 10. 16 閲覧)
8. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/06/16/1384662_2.pdf (2018. 10. 16 閲覧)
9. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/new/1403682.htm (2018. 10. 16 閲覧)
10. 山下薫子「平成 29 年版小学校新学習指導要領ポイント総整理 音楽」東洋館出版社 2017、p. 1-158
11. 武本（旧姓・中田京子）「生徒と先生のための『楽曲イメージ奏法』」ドレミ楽譜出版社、1995 年、pp. 1-95
12. 武本京子「『楽曲イメージ奏法』とは」ムジカノーヴァ 2012 年 7 月号、pp. 8-9. (武本 2012a)
13. 武本京子「『楽曲イメージ奏法』とは」ムジカノーヴァ 7 月号 2012、pp. 8-9
14. 武本京子「『楽曲イメージ奏法』により曲を演奏するための設計図作ろう」ムジカノーヴァ 2012 年 8 月号、pp. 64-67. (武本 2012b)
15. 武本京子「ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の『イメージ奏法』解説書」音楽之友社、2013 年、pp. 1-40. (武本 2013a)
16. 武本京子「ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の『イメージ奏法』によるワークブック：ブルクミュラー 25 の練習曲」音楽之友社、2013 年、pp. 1-48. (武本 2013b)
17. 武本京子「『イメージ奏法』で[人間力・心の力]を育てるレッスンを」ムジカノーヴァ 4 月号 音楽之友社 2014、pp. 57-59
18. 武本京子「『イメージ奏法』による『音楽の構造』のとらえ方と『イメージに導かれた表現方法と奏法』」音楽表現学 第 13 号 (2015 年) 日本音楽表現学会、p. 91. (武本 2015)
19. 武本京子「『イメージ奏法』の教育法」ムジカノーヴァ 5 月号 音楽之友社 2015、pp. 69
20. 武本京子、山口茉莉子、安田実央、松川侑里香、小坂有紀「イメージ奏法」の楽曲分析による演奏法と教育への適用 —大学でのピアノ演奏指導と小学校音楽教育での実践— 音楽表現学 第 14 号 日本音楽表現学会 pp. 86-87 (武本 2016)
21. 武本京子「アクティブ・ラーニングを実践するための『イメージ奏法』を使った ICT 活用授業」音楽表現学 第 15 号 (2017 年)、日本音楽表現学会、p. 173. (武本 2017a)
22. 武本京子「ICT 機器を使った対話のプロセスの中で変容していく『イメージ』を確立した音楽表現へ導く授業の取り組み ——アクティブ・ラーニング実践授業」平成 29 年度日本教育大学協会研究集会発表概要集、日本教育大学協会、2017 年、pp. 128-129. (武本 2017b)
23. 武本京子、市橋奈々、佐野美咲、安田実央、松川侑里香、山本紗友理「教育現場における『イメージ奏法』——ピアノ演奏法から教育法への展開」音楽教育学 第 47 巻、第 2 号 (2017 年) 日本音楽教育学会、pp. 100-101. (武本 2017c)